

日本人の抱く「ゴビ」desert のイメージ

—その地理教育との関係をめぐって—

米地文夫*

(1995年1月19日受理)

はじめに

日本には desert はない。しかし、いわゆる「ゴビ砂漠」は、日本に最も近い位置にある desert であり、多くの日本人が、最も古くからその存在を知り、かつ情報を持っていた desert である。

したがって「ゴビの砂漠」は、長い間、或る鮮やかなイメージの景観として、日本人の心のなかに、描かれ、それが desert の代表的な景観と思われてきた。しかし、それは現実のいわゆる「ゴビ砂漠」や desert とは、かなり異なるものか、あるいはその極く小部分にしか過ぎないものか、のいずれかであった。

筆者は、いわゆる「ゴビ砂漠」が地理教育上の自然地域名称として多くの問題があることを、主にモンゴルと中国における「ゴビ」のとらえ方の検討を通じて論じた(米地 1994)が、本稿は日本ではどのようにとらえられてきたかを論じ、さらに地理教育上でどのような点が問題であるかを考察し、さきの論文を補完したい。

また、先の論文(米地 1994)では、desert (いわゆる「砂漠」)に当たるものとして、「漠」という呼称を用いることを提唱した。本稿にも、この語を試用することをご寛恕いただきたい。

前報と若干重複させつつ補足すると、もともと中国大陆ではタクラマカン漠から現在のゴビ漠に至る広大な地域を一括して、漢語で沙漠(シャモ)と呼んだり、モンゴル語のゴビに牙壁という字を当てたりして呼んでいた。この「沙漠」という語が日本に入り、明治以降 desert の訳語となった。さらに第二次大戦後は「砂漠」と書かれるようになった。「沙」も「砂」も同じ意味で、前者が本字、後者は俗字である。「漠」には、もともと「水が莫(な)い」¹⁾という意味があり、水の無い原、ないしは desert を指す語²⁾としても「沙漠」と同様に、漢民族の文化圏で用いられてきた。中国では、既に漠全体は荒漠と呼び、砂に覆われた desert のみは沙漠、その他の desert は牙壁と呼んでいる。ゴビはもともと、モンゴルでは普通名詞として用いられることが多く、その場合、ゴビは主に礫で覆われ、疎らに草のある、おおむね遊牧が営まれ得る土地になっている。農耕民の漢民族にとってはゴビは不毛の地、遊牧民のモンゴル民族にとっては生産や生活の可能な土地、と異なった見方がなされていたことを、前報で指摘した。

* 岩手大学教育学部

I 明治前期までの日本における「ゴビ」のイメージ

1 「ゴビ」と「胡沙」

ゴビの名がいつから日本に知られたかは、未だに明確ではないが、ゴビに当たる「漠」の存在は、古くから胡沙とか流沙などの語とともに知られていた。「胡沙」とは漢和辞典によれば、蒙古の沙漠すなわちゴビのことという。ところが、国語辞典によれば、蝦夷人の吹く息のことで、不可思議な力をもつものという。後者の胡沙については西行の作と伝えられる（藤原為家ともいう）次の歌がある。

胡沙吹かば曇りもぞするみちのくの蝦夷には見せじ秋の夜の月（夫木和歌抄）

万里の長城以北のゴビとそこに住むモンゴル民族などの遊牧民を、白河関以北の東北の地とその住民とにみだてることは、古代までの西日本に住む知識人の中に、イメージ（というよりも、むしろ妄想）として存在していたようである。中国に対する劣等感から、自国つまり日本（大和朝廷の勢力圏と呼ぶべきかも知れない）の知識人たちも、漢民族と同じく文化の中心に住む民族であるという意識を持ちたいと願っていたと考えられる。それが自分たちの住む地域の彼方にも、辺境に住む胡族のような蛮族すなわち蝦夷がいるということをイメージとして膨らませていき、胡沙すなわちゴビを、蝦夷の息の魔力などという意味にまで拡張した³⁾ものであろう。

日本における初の本格的な世界地誌といわれる西川如見の『増補華夷通商考』（1708）巻の五の韃靼国の項には、「一國平地は皆砂にして大山多く大河少き國なりと云」とある。同書の地図には韃靼国は載っていないが、同じ西川如見の『日本水土考』（1721）のなかの亜細亜大州図の韃靼国は現在のモンゴル高原一帯を指しているように図示されている。

一般には、いわゆる支那（中国）大陸の西方、いわゆる西域から、同じく北方のモンゴル高原に至る乾燥地域を一つにみており、唐詩や史書からそのイメージを得ていた。例えば、橘南谿の『東遊記』（1795）には、庄内海岸の砂丘で早春の飛砂に出合った体験を述べて、次のように塞北すなわち万里の長城の北、モンゴルのゴビとおぼしき地域を連想している。

…日として風吹かざることもなく、沙塵常に天を覆ふ。唐詩にいへる、北風動地とはかかる景色ならん。其吹ちらす沙、風の吹廻はしによりて、所々に吹たまり、或は堤のごとく塚のごとく、日々に其形変ず。其上、北地の草木は、皆秋の末より春の末までは青き葉は無く、渺々たる砂漠に、白草の風に動く体、かの塞外沙漠の事作れる詩にいふ所に少しも違はず、げに北極地を出ずること四十度にあまりて塞北の地にひとしければ、かかる風色の相似たるも怪しむにたらず。日本のうちにかかる所ありとは聞きも及ばざりしが…（後略）

『東遊記』には胡沙吹くという章もあり、東北の日本海側について風が吹き空が曇ることを記し、まして蝦夷の方は「胡塵空に満る」としている。

2 日本における「ゴビ」の名の登場

具体的に「ゴビ」にあたる名が挙げられているものとしては、江戸時代末の地理学書『坤輿図識補』（箕作省吾 1846）がある。この書には「『ゴビ』一名翰海」として記されている。また明治初期の『百科全書 地文学』（関藤成緒訳 1877）にも「ゴビノ沙漠」の名がある。ゴビではなく、ゴビと表記されているのは中国の発音に倣ったためであろう。

教科書では、内田正雄纂輯の『輿地誌畧』（1870）に既に記載があり、支那韃靼の総論部分には「所謂戈壁或ハ瀚海ト名クル大沙漠有リテ東西五百餘里ニ跨リ南北二百里ヨリ二百七八十里ニ達ス」とあって、戈壁にはゴビ、瀚海にはシャモとルビが振られている。また各論に相当する蒙古の部分には「廣大ナル平原ノ地ニシテ其中戈壁ノ大沙漠東西ニ蔓延シ土地ヲ二部ニ別ツ其長城以外、沙漠ニ至ル部分ヲ内蒙古ト稱シ沙漠ト阿爾泰山脈ノ中間ニ在ルヲ外蒙古ト稱ス」とある。同書の地図「支那全図」には、モンゴル高原からタリム盆地へ続く文字どおり広大な砂漠地帯が点描で示され、モンゴルの方には「ゴビ大沙漠」、タリムの方には単に「大沙漠」とそれぞれ名が記入してあるが、切れ目のない一連のものとして図示されている。

また師範学校編輯（1874）の『萬國地誌略』もほぼ同様で、「蒙古ハ滿州ノ西ニ在テ、廣大ナル平原ノ地方ナリ、（中略）戈壁又翰海ト名クル大沙漠アリテ、東西ニ亙ル、國內ヲ、二部ニ別チ、沙漠ノ南ヲ、内蒙古ト云ヒ、沙漠ノ北ヲ外蒙古ト云フ」とある。「輿地誌畧」と違うのは、戈壁にはゴビと振り仮名があり、瀚海が瀚海となっている（シャモというルビは同じ）点のみである。

南摩綱紀編（1880）の『小学地誌』巻三になると、蒙古については「部内概ネ沙漠ナリ。之ヲ戈壁ト稱ス。東西凡五百里。南北三百里アリ。沙漠ノ南ヲ内蒙古ト云ヒ。北ヲ外蒙古ト云フ」とあり、やはりゴビと仮名を振っている。このころから、名称は戈壁のみを挙げるが多くなり、読みはゴビとされるようになったらしい。

これらにみるように、長い間、いわゆる中国本土の北のゴビも、西の「沙漠」（一部はゴビでもあるが…）も同じようなものと見られていた。すなわち、「ゴビ砂漠」の位置に「沙漠」があることは良く知られていたものの、西域の「沙漠」と同一視され、砂一面という情景が人々の脳裏に刻み込まれていたのである。

前述の『輿地誌畧』（1870）における「沙漠」一般についての記載はこうである。

沙漠ハ概ネ沙磧礧礧ノ瘠土ニシテ川澤少ナク草木ヲ生スル稀ナリ又周歲雨ヲ降ス稀ニシテ絶テ耕作スベカラズ亜非利加洲ノ内地ハ大略沙漠ノ處多シ其他亞拉比亞及ヒ支那ノ北部等ニ大沙漠有リ

この記述は、岩石からなるものについての的確な記述がないなどの欠陥はあるものの、「少なく」とか「稀」と表現して、絶無というような断定を避けるなど適切な表現を用い、現在のdesertの認識との大きな相違は少なく、きわめて高いレベルの理解に基づいていることがわかる。これに対して、その後に刊行された師範学校編纂（1875）の『地理初歩』では

至ル所、皆沙ニシテ、水草ナキヲ沙漠ト云フ、

となり、いわば江戸時代並に後退したといえる。この「水草ナキ」という表現は、玄奘の『大唐西域記』のなかの「水草ニ乏シク、熱風多シ」などという記載を想起させられる。しかも、

この書は「明治前半期の小学校における教科書を代表するものとみるべき」で、明治十年前後の府県小学校教則によってみると、この書を小学校の初学年で使用するように指示してある（『日本教科書大系 近代編 15巻』所収教科書解題）という。『日本地誌略』や前述の『萬國地誌略』とともに三部作として、文部省から刊行された地理教科書の最初のものとして、その後の地理教育に大きな影響を与えることとなった。

この師範学校編纂・文部省刊行の三部作では、ゴビという正しい読みが使用され始めた点は評価でき、瀚海のような別称を省いたことによりスッキリした形になっているが、沙漠についての説明は砂のみとした古い認識に戻っている。内田の『輿地誌畧』が小学校のみならず中等学校の教科書としても用いられ、社会一般への啓蒙書ともなったのに対し、この三部作は小学校教科書としての明確な目的をもっていた。それゆえに小学校段階での学習者の理解のレベルに合わせて簡略な記述としたということかも知れない。しかし、そのことは、簡略化というよりも、むしろ誤った認識ないしは理解をもたらすことになりかねない。日本人のゴビをはじめとする「漠」desert 認識の歪みを作ったことの責めは、その一半をこのころの文部省・師範学校ラインによる地理教科書が負わねばならないと考えられるのである。

また、この師範学校編纂・文部省刊行の地理教科書三部作は、価格も安かったことや、各府県が復刻版を刊行したことから、他書と比較にならぬほど普及した⁴⁾ものらしい。

このようなイメージは、例えば一般向けの『農業辞典』（1906年、稲垣乙丙著、博文館）などにもみられる。

さばく(砂漠) 大ナル砂原ナリ地上砂ノミニシテ草木ナシ畢竟コレ降雨ナキノ結果ニシテアフリカノさはらノ砂漠、蒙古ノゴビノ砂漠アラビアンノ砂漠等ハ其最モ著シキモノナリ

II 近代日本におけるゴビ「砂漠」のイメージ

1 砂の漠としてのゴビ「砂漠」のイメージ

前述のような教科書の記述は、当然、日本人に砂一面のゴビのイメージを植え付けた。例えば海外へ一歩も出ることのなかった石川啄木にも、

はてもなく砂うちつづく
戈壁(ゴビ)の野に住みたまふ神は
秋の神かも

という歌⁵⁾がある。「ゴビ漠」は、一面砂ばかりの土地とイメージされているのである。

また、ゴビから(実際には黄土高原からも)飛来する dust による、いわゆる黄砂現象は、春の気象現象として、よく知られている。宮沢賢治の文語詩稿にも「月朧し ゴビの砂塵によるといふ」と題する詩がある。

さらに、「ゴビ漠」は、日本人にとっては、辺境の地の代表的なものとしても認識されてきた。例えば、優れた伝記として定評のある加茂儀一(1960)の『榎本武揚』には、「その当時の(米地注、1878年頃)日本人から見れば、シベリヤは全くゴビ砂漠と同じくらしい辺境の地と考えられていた」とある。確かに、明治時代から昭和まで、「ゴビ沙漠」は良く知られていたが、そ

のイメージは砂一面の辺境そのものだったのである。

和辻哲郎(1935)の『風土』には、desert および「沙漠」についての、かなり適切な見識が盛られている。それを引用(岩波文庫版1979による)してみよう。

「沙漠」という言葉は通例“desert”の同義語として用いられる。自分もその用語例に従って、この言葉によりアラビア、アフリカ、蒙古等に存するきわめて特殊な風土を言い現わそうとするのである。しかし「沙漠」と“desert”とが本来著しく意味を異にする言葉であることは、これらの言葉の意味を反省した人の直ちに気づくところであろう。(中略)

「沙漠」という言葉は我々がシナから得たものである。これに対応する日本語は存しない。「すなはら」は沙漠ではない。厳密な意味において日本人は沙漠を知らなかった。しからばシナ語としての「沙漠」は何を意味するであろうか。現代のシナ人は日本人からの逆影響によって沙漠を desert の同義語とする。しかし古き用法においては「沙漠」はゴビの沙漠をその直感的 content とする言葉であった。(後略)

和辻の文はこのように「沙漠」と“desert”との関係について論じ、さらに desert について、「desert なのは人と世界との統一的なかかわりである」と自分の考えを述べたのち、次のように述べている。

desert が地理学的な用語とされたときには、しかし、人は「人間と独立なる自然」を取り扱うのであると信じた。それは雨量の欠乏によって生じた荒漠不毛の土地である。が、この場合にも人はアラビアやアフリカにおける荒漠不毛の土地を直感的 content として desert の概念を作った。突兀たる岩石の露出せる荒地は rock desert であり、礫の海は gravel desert であり、砂の海は sand desert である。したがって沙漠の語はただ sand desert にのみ当たるのであって一般に desert に当たるのではない。(後略)

以上の記述は、地理学の現在の知見からみても、ほぼ非の打ち所のない的確な記述である。ただし、《古き用法においては「沙漠」はゴビの沙漠をその直感的 content とする言葉であった》という記述には若干の注釈を要しよう。というのは、古くはゴビの沙漠とは、現在いう、いわゆる「ゴビ砂漠」、筆者のいうゴビ漠ばかりでなく、その西方に広がる現在タクラマカン砂漠(漠)をも包括する広大な乾燥地域の総称であった。従って、かつては sand desert が主であるタクラマカン漠から「沙漠」という表現が生まれたのである。中国ではゴビ漠の主たる部分を占める gravel desert (あるいは広く sand desert 以外の desert 一般)を「牙壁(ゴビ)」と呼び、sand desert を「沙漠」としている。和辻の文に欠けているものがあるとすれば、それは彼の文中の「ゴビの沙漠」は、現在のゴビ漠ではなく、むしろタクラマカン漠なのであることの認識が無いことである。すなわち、和辻ですら「ゴビの沙漠」は砂で覆われた desert であると考えていたらしいのである。

ゴビが砂ばかりでなく礫にも覆われた土地であることは、その地を訪れる人が増えるにつれて、日本でも徐々に知られてきた。例えば、加藤楸邨の句にそれを読み取ることができる。

沙礫灼けしんたるかなやゴビの天

しかし、楸邨の場合にも、旅のあと、月日が経ってからの句には、次のように、やはり砂の印象が強く残るのである。

風邪熱やゴビの手帳にゴビの沙

2 海外雄飛ないしは侵略の対象として意識された「ゴビ漠」

司馬遼太郎は『街道をゆく モンゴル紀行』（1978）の中で飛行機から初めてゴビを見下ろした時の感慨をこう書いている。

（これが、ゴビ沙漠か）何度も自問した。大正末期から昭和二十年までに、少年期を送った多くのひとびとにとって、単なる地理的呼称以上の文学性もしくは思想性を帯びた砂漠が、目の下に、限りなく大きさをひろがっているのである。そのころの少年たちにとって、この砂漠の名称は呪文のようなものであった。

さらに「この地理的名称を唱えるとき」には「日常の羈絆からにわかには解き放たれ、ひろびろとひろがる無償の理想的行為の可能な世界へとび立てるような錯覚をおぼえたものであった」と回想している。

しかし、このような憧憬は、他方では帝国主義、軍国主義にも利用される危険性も孕むものでもあった。第二次大戦以前の日本にとって、「ゴビ漠」はその植民地的侵略の対象の一つと目され、青少年の海外雄飛の地として一種の憧れでもあった。「満蒙」という語は、満州と蒙古の略称であるが、日本の軍部は中国東北地方の当時「東三省」と呼ばれていた地方を、その侵略のターゲットとして「満蒙」⁶⁾と呼んだ。「満州国」には、その西北部、大シンアンリン山脈（大興安嶺）以西のモンゴルや中国の内モンゴと一続きの乾燥地域が含まれていたものであり、この地域は「ゴビ漠」の一部とみて差し支えない。現在、中国では旧満州国地域のうち、大シンアンリン山脈（大興安嶺）以西は内蒙古自治区に含まれるものとし、東北地方から分離しているのも、このような地域性によるものである。

そのために、一方では「ゴビ漠」とその周辺の科学的な調査が行われた。これは資源開発や軍事上の必要性によるものである。

他方、当時の青少年の心情の反映として、非科学的ないしは卑俗な「ゴビ漠」観が普及した。一面の砂原というような前述の文学作品などは前者の例であり、後者としては、馬賊としてゴビの砂原を疾駆するというような夢がしばしば青少年たちによって語られたことが挙げられる。その夢は、「僕も行くから君も行け 狭い日本にゃ住み飽いた」で始まる「馬賊の歌」（1922、大正11年）にも「銀月高く空晴るる ゴビの沙漠にゃ草枕」と歌われ、デカンショ節（年代不詳）の「万里の長城で小便すれば、ゴビの沙漠に虹が立つ」といった歌詞にも窺える。また、当時の少年雑誌には、ゴビ沙漠を舞台とする、山中峯太郎の『萬国の王城』などのいわゆる熱血冒険小説の類いが人気を集めた。当時の少年には、そのゴビへと連なる満州の曠野や満鉄の超特急「亜細亜号」などへの憧れもあった⁷⁾。

このような夢ないしは妄想の帰結は、ノモンハン事件（ソ連・モンゴル側ではハルハ河戦争と呼ぶ）と第二次大戦末期のソ連参戦時の戦闘による惨憺たる敗北であった。ちなみにノモンハンの戦闘はこの地域とモンゴルとの国境地帯において行われ、ステップ地域を主たる戦場に

し、一部はホロンバイル（フルンボイル）沙地と呼ばれる半乾燥地域の固定砂丘地帯に及んだ。五味川純平（1978）は著書『ノモンハン』において「ゴビの砂漠の東端、ホロンバイルの平原という無人地帯で」戦われた戦場であるとして、次のように述べている。

戦場となったノモンハン付近は、満州の西北、興安北省（旧称）が外蒙古と境を接するあたりの砂漠と草原の波状地帯である。

五味川はこうも書いている。「国家の面目にかけて、不毛の地の寸土を争い、夥しい鮮血が砂漠に吸い込まれたのである。」

3. 詩情を感じ憧憬を抱く対象としての「ゴビ漠」

第二次大戦後も、ゴビに関する関心は薄れなかった。1947年、「三日月娘」という歌が流行ったが、その歌詞は「幾夜かさねて沙漠を越えて…」に始まり、ラクダやキャラバンが歌詞にみられる。詩人三好達治は同じく1947年に詩「興安嶺」を書き、1949年に詩「駱駝の瘤にまたがって」を書き、三日月が砂丘の上にかかるイメージを書いている。フタコブの駱駝に東洋的詩情と西洋的詩情とを暗示しているというが、いずれにしろゴビがイメージされているのであろう。

戦後のそのような状況下で、旧満州などの体験を踏まえて、「ゴビ漠」をはじめ「漠」ないしは乾燥地域一般に関する認識を深めた人も少なくない。そのような例として、地理学者では多田文男や千葉徳爾が、作家では安部公房や司馬遼太郎が挙げられる。ここでは、作家の事例をあげてみる。

安部公房は『砂漠の思想』（1958）の中で「半砂漠的な満州」で幼少年時代を過ごしたので、「砂漠にあこがれを持っていた」と述べている。安部は作品『砂の女』などで砂に強い関心を持っていた作家ではあったが、「岩石砂漠」についても論及しており、乾燥地域に対して的確な認識を有していた。しかしながら、安部は日本人一般の「砂漠」認識のレベルの低さを、西アジアの「砂漠」を背景としたフランス映画を例に引き、こう結んでいる。

こと砂漠に関するかぎり、私たちよりはフランス人のほうが、まだはるかに深く東洋に足をふみこんでいるものようである。

司馬遼太郎は『草原の記』（1992）の中でも「ゴビ沙漠」について語っているが、「ゴビというのは半沙漠という地理的な普通名詞で、サハラのような沙ばかりの沙漠ではなく、ところどころに草が疎生している状態の大地」を指していると、モンゴル語を学んだ人らしい適切な解説をしている。したがって「半沙漠」にゴビと振り仮名を使ったりもしている。

ゴビ漠へ強い関心を示した評論家の例としては、花田清輝が挙げられる。彼は「草原について」（1965）というエッセイで「いまだにモンゴルの草原のイメージを、あぎやかにおもい描くことができないのかもしれませんが」と書き、「砂」漠への強い関心が草原のそれよりも強いことを記している。同氏の「沙漠について」（1948）というエッセイは「砂」への強い思いが述べられている。

観光地として鳥取砂丘や伊豆大島の三原山の火山礫原が人気を集め、ラクダをおくなど、des-

ert のイメージとダブらせる工夫がなされてきたのも、ゴビに代表される desert への想いになんだものであった。砂丘に植生が茂りはじめ、三原山は噴火のこともあり、以前のように desert イメージは観光客に伝わらなくなっているという。

最近では、ゴビに関しては往年の関心に比べれば低くなってきてはいるが、西域ブームないしはシルクロードブームの波及や観光の対象としての認識が徐々に強まってきている。

西域ブームの火付け役の一人ともいべき井上靖は『西域物語』（1969）のなかで、西域とは、今日では中央アジアに限定されるとし、その中央アジアについて、こう書いている。

（前略）私はいま中央アジアという呼び方をしたが、これもまた甚だ漠然とした呼称であって、明確にその範囲が決められてあるわけではない。まあ、アジア大陸の中央部、海に出口を持たない内陸地域で、東はゴビ沙漠から西はカスピ海に到る広大な地域と考えていいだろう。

シルクロードブームの頂点はNHKの海外取材番組放映時であり、1980年前後に始まる大ブームとなった。西安（長安）から蘭州、さらに玉門関を経て、天山南路・北路などへと向かうシルクロードに沿う取材に、北のゴビ漠のカラホトへの、いわば寄り道の取材が加わっている。その番組では確かに礫の多いゴビ本来の景観もあったが、くりかえし登場し、番組のイメージを支えたイメージは、取材のために「特に」編成したラクダのキャラバンが鈴を鳴らし、砂丘を踏んで進む光景であった。それはゴビ「砂」漠の従来のイメージに合うものであった。

III 現代の学生・生徒のイメージする「ゴビ漠」と desert

1 大学生のイメージする「ゴビ漠」と desert

岩手大学における「自然地理学」の開講時（1993年4月22日）に次のような質問を試みた。

A. ゴビ沙漠(砂漠)とは、どこにある沙漠か？

また、その地表および地上には、どのような景観がみられるか？

（その景観を絵として描け）

B. 日本において沙漠(砂漠)に似た地域があれば、その地域の名を答えよ。

また、その地域にみられる地形には、どのようなものがあるか？

これに対して、表1・2の結果が得られた。

表1 ゴビ漠に関する問（質問A）に対する回答

景観	地理的位置	ほぼ正しく 答えた者	誤答ないし 無回答者	計
		実数 (%)	実数 (%)	実数 (%)
I : 岩や石が描かれ時には砂も交じる		19名 (17.6%)	4名 (3.7%)	23名 (21.3%)
II : 一面砂、または砂山ばかりを描く		36名 (33.3%)	19名 (13.3%)	55名 (50.9%)
III : 地表が何に覆われているかが不明		19名 (17.6%)	11名 (10.2%)	30名 (27.8%)
計		74名 (68.5%)	34名 (31.5%)	108名 (100.0%)

表2 砂漠に類似する日本の地形に関する問（質問B）に対する回答

		鳥取砂丘など砂丘を挙げた者	他の地形も挙げるか日本には無いとした者	計
質問Aに対する回答	I	実数 (%) 20名 (21.2%)	実数 (%) 3名 (3.2%)	実数 (%) 23名 (24.3%)
	II	55名 (57.7%)	0名 (0%)	55名 (57.7%)
	III	13名 (13.7%)	4名 (4.2%)	17名 (18.0%)
計		88名 (92.6%)	7名 (7.4%)	95名 (100.0%)

(注：IIIのうち2名はわからないと考えた。ほかに無回答13名。)

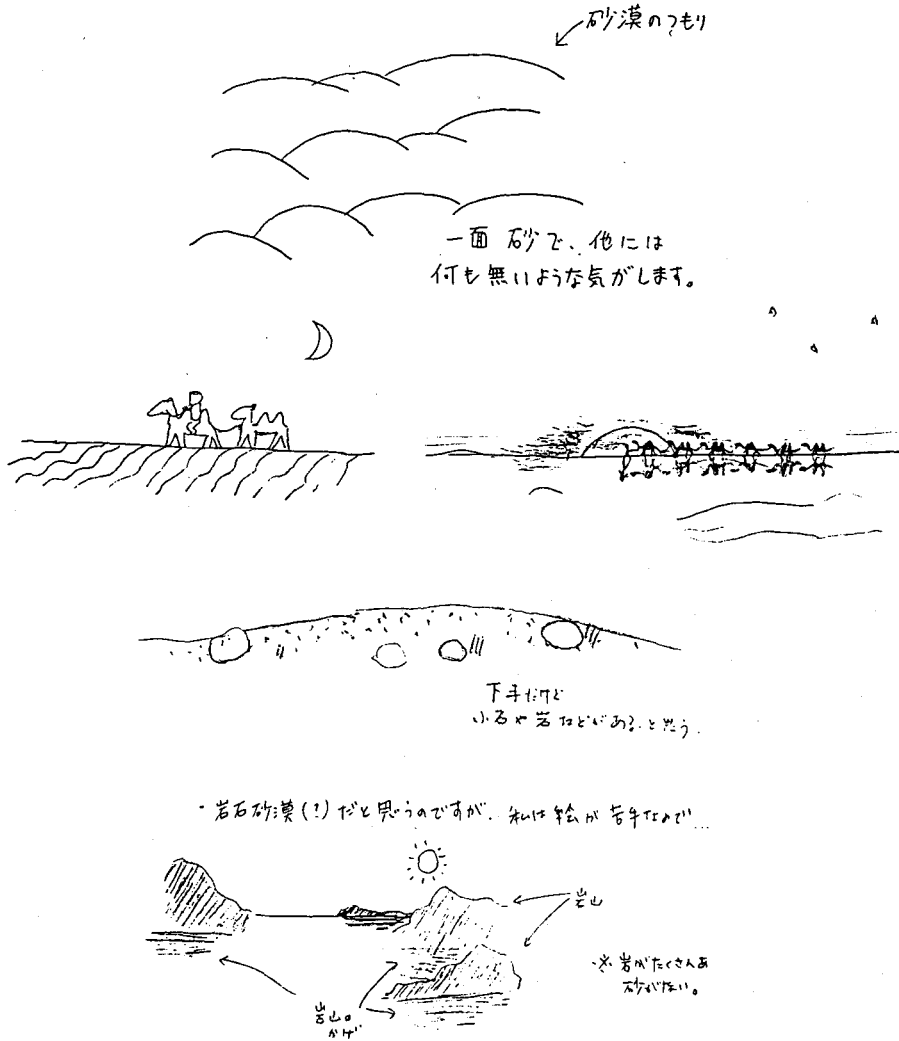


図1：大学生の描いた「ゴビ沙漠」のイメージ
1993年4月、岩手大学教育学部2～4年生の描いたもの
なかから代表的と思われるものを掲げた。

このように、現代の学生達も、「ゴビ漠」に対しては、7割がほぼその位置を正しく理解しているものの、その景観としては、多くが前述の啄木の歌と同じく、砂一面の「さばく」を連想し、「砂漠」という語に日本の砂丘を連想するステレオタイプのイメージにとどまっているのである。図1は岩手大学の学生が描いた「ゴビ漠」像の二三の例である。

また、1994年9月、182名の福岡大学の人文系各学部2～4年次学生に「砂漠」のイメージを聞いた。学生に対する質問は、明暗、軽重、動静の三組の語のどちらが「砂漠」のイメージに近いかを尋ねるものであった。結果は次のとおりであった。

明：147名—暗：35名
 軽：103名—重：79名
 動：55名—静：127名

学生の一人一人がどのような組み合わせの答えを行ったかを調べると次のようになる。

明軽動：34名	暗軽動：4名
明軽静：58名	暗軽静：7名
明重動：13名	暗重動：4名
明重静：42名	暗重静：20名

判然とした差の出たのは明暗である。「明」147名、「暗」35名という結果は、「砂漠」という語に、晴れわたった炎天や皓々たる月夜を連想するからであろう。

「軽」と「静」の組み合わせと「重」と「動」の組み合わせは、一見矛盾している。軽いものは動きやすく、重いものはどっしりと静かな印象を与えるからである。しかし、実際には、矛盾しない軽動または重静の組み合わせを答えたものが100名あったのに対して、矛盾する軽静または重動の組み合わせで回答したものは82名と、全体の半ば近くを占めた。とりわけ、「軽」と「静」の組み合わせは65名で、「重」と「静」の62名、「軽」と「動」の38名、「重」と「動」の17名を上回り、最多の組み合わせであった。「砂漠」という語から、さらさらと流れ、風に飛ぶ「砂」の軽いイメージがあり、他方、静謐な死の世界、無人の世界を連想するのである。

2 高校生のイメージする「ゴビ漠」と desert

高校生のイメージする「ゴビ」および「砂漠」については、1994年6月、仙台商業高校の2年生について梅津讓教諭にアンケート調査を行っていただいた。以前授業で触れたにもかかわらず、調査してみると、おおむね画一的な(砂一面というような)イメージしかもっていないことがわかった、とのことであった。その一部を次に紹介する。

「砂漠」 についての高校生のイメージ

- 砂ばかり、砂だらけ、ターバンを巻いた人がいる。
- 砂ばかりで、ピラミッドが見えてきそうな感じ。
- 全体が砂で、オアシスがあり、風が吹くと砂ばかりが立つような所。

- 砂と岩が多く広がっていて、砂あらしで足跡がなくなるイメージ。
- オアシスで女の人が壺を頭に載せて歩いているイメージ。
- 周りは砂だらけで、うんうん歩いても景色は同じ。
- どこまでも金色っぽい砂が続き、木も何も生えていない。
- 暑くて一面砂だらけだが、遠くから見るときれいなイメージがある。
- 水が無くて砂がサラサラ、暑い、ラクダ、茶色。
- まわり一面砂だらけ、遠くを見るとたまにオアシスが見える、が、それは幻。
- 360°どこを見回しても平らで砂しかなく、サソリがうようよしているような所。
- 木も何も生えず、風が強くて砂がいっぱいある所。
- とても暑くて砂嵐などがおきていて、水が一滴も無いような所。
- 見渡すかぎり砂だらけ。
- 砂の下からモアモアとなんかメラメラするものが上に昇って行って、そこを歩くと喉がカラカラになりそう。
- 日中はとても暑い。夜は寒い。水が無い。砂がたくさんある。
- 暑くて乾燥し、生物がいなく、死の世界のような感じがする。
- 暑い。ラクダ。
- 灼熱地獄。砂嵐。
- 砂だらけで暑い。
- サハラ砂漠のイメージが強い。

「ゴビ砂漠」 についての高校生のイメージ

- とても広く広い。
- 一般に挙げられる砂漠と同じ。
- 同じ砂漠だから変わらない。
- ただのさばく、ただ面積の広い所であって、ごく普通。
- 普通の砂漠と同じイメージ。
- 砂漠はどこもいっしょ。
- どの砂漠も同じだと思っているから、特定のイメージはない。
- とても広くて、人が寄りつきそうもない。
- 砂と石だけがある感じ。
- 岩がごろごろとしていて、まばらに草が生えている。
- 広大な人も立ち入りできないような、とても広い砂漠。
- 山に囲まれていて、これまた360°見回しても、山と砂しかない。
- 風が強くて砂嵐がおきていて、年々広がっている。
- 砂ふぶきがたっている。
- 細かい砂ではなく、岩肌が出ている感じ。
- 高原の中にある。
- 寒い。
- サハラより暑さが厳しくなく、生物も多少いるような感じがする。
- 同じさばくでも人が住めるようなイメージがある（住めないかも知れないけど）野生の動物がいつ

ばいいそう。

- とにかく恐竜の骨が出てきて、人骨もあつたり、砂嵐は吹くし、とんでもないところ。
- 名前は聞いたことがあるが、よくわからない。
- 砂漠で二番目に有名。1. サハラ、2. ゴビ、3. タクラマカン。

この調査からは、やはり「砂漠」は砂だけがあるという一般的なイメージを高校生も持っていることがわかる。またゴビ「砂漠」についても、同じ砂だらけというイメージをもつものが多く、サハラと違って、寒い、あるいは人や生物がいるような感じなど、と書いているものもある。しかし、礫や岩のあることを指摘したものは僅かである。一般に、ゴビを特に強く認識しているものは少なく、一般の desert と同じとしているものが多い。

IV 「ゴビ漠」のイメージに関する問題点

1 社会科および地理教科書のなかの「ゴビ漠」

第二次大戦後においても、ある時期までは、「ゴビ漠」は「漠」のなかでもサハラ漠に次いで、教科書に取り上げられていた。例えば、東京学芸大学地理学教室（1980）がまとめた中学校社会科教科書（8社）における地名の出現頻度の資料によると、1978年発行のものにおいては、「砂漠」については、一位が「サハラ砂漠」で8社の教科書全部に登場し、計28回、二位は「ゴビ砂漠」で3社で4回、次いで「リビア砂漠」と「タール砂漠」がそれぞれ1社1回ずつで、他の漠名は出ていない。

1993年5月、教科書（地図帳などを含む）の地名を検討する「地名表記の手引」改訂委員会がまとめ、各方面からの意見を聴取中である「地名表記の手引」改訂案には、「中国の地名の中で中国語以外の言語による地名の表記は片仮名で書き、漢字は添えない」とあり、その例に「ゴビ〔砂漠〕Gobi」があり、「ゴビ砂漠」は一見、健在?のようにみえる。

2 最近の教科書における「ゴビ漠」の扱われ方

最近の教科書からは、ゴビに関する記述は減りつつある。

その原因の一つは、地誌的内容が減ったことである。

ゴビ漠の扱われ方を、東京書籍の高校用地理教科書（4単位用）にみてみると次のようになる。

平成2年2月発行の『地理—自然と人間—』における漠の使用頻度

- サハラさばく：2箇所
- ゴビさばく：1箇所
- アタカマさばく：1箇所

乾燥地形の注の中に「ゴビさばく」が登場し、「…ゴビさばくの『ゴビ』もモンゴル語でれきさばくを意味している」と書かれていた。

平成6年2月発行の『地理B』における漠の使用頻度

サハラ砂漠：8箇所
 ゴビ砂漠：なし
 タクラマカン砂漠：1箇所
 アタカマ砂漠：1箇所

ほぼ同一の執筆者たちによって作られた新旧の教科書を比較すると、具体的な漠の名の登場する回数は4箇所から10箇所に増えているにも拘わらず、ゴビ漠は姿を消している。

同じ出版社、ほぼ同じ執筆者による2単位用教科書は次のようになっている。

平成6年2月発行の『環境と人間 地理A』における漠の使用頻度

サハラ砂漠：3箇所
 ゴビ砂漠：1箇所
 タクラマカン砂漠：2箇所

これにはゴビ砂漠の名が登場するが、これは中国の地形の記述のなかに、「…大山脈にはさまれるように、チベット、モンゴルの各高原とタクラマカン、ゴビの砂漠が内陸部に広がる。」とあり、乾燥地域の説明のなかに挙げられているわけではない。

すなわち、少なくとも相対的にゴビ漠の比重は下がっている。

なお、東京書籍の教科書は「漠」を「さばく」と平仮名書きにする意欲的試みを行っていたが、平成6年版では「砂漠」に戻している。しかも『地理B』には、わざわざ次の注がつけられている。

砂漠(desert)とは、ほんらい不毛の地を意味する。中国語では沙漠と書く。したがって、砂漠にはもともと砂という意味はない。

この注記の後半は、厳密に言えば誤りである。中国語で沙漠と書かれているのは確かであるが、その「沙」は砂を意味するのであり、もともと sand desert を意味しているのである。日本の研究者は「沙漠」を使うことが多く、その場合、「沙」は水が少ないという意味で、「砂」を意味しないから適切であると説明されることが多い。しかしながら、これは誤りで、米地(1994)が指摘したように「沙」は「砂」なのであり、赤木(1994)もほぼ同様の指摘を行っている。

V 「ゴビ」と desert のイメージに関する若干の考察

1 近年における「ゴビ」のイメージの変化

日本においても、徐々にゴビのイメージが変わってきている。それはゴビについての情報量が増えたからである。特にテレビ番組や映画などによる視覚的な情報にそれが著しい。しかし、モンゴルや中国内モンゴルに関する現地取材のテレビ番組も多くはなかったが、ゴビの景観が主で、しかも、それらは日本人の目でセレクトされており、日本人のもつイメージに合わせた取材といえるものも少なくない。それにひきかえモンゴル高原の人々、なかでもゴビに住む人々がゴビをどう考えているのかについては、なかなか日本人には知り難い。例外的なもの、モンゴル

で製作された映画やテレビ番組である。例えば1994年6月12日に日本で放映されたモンゴル映画「ゴビの蜃気楼」⁹⁾(1980年製作, 原題 TORGObI)には, ゴビによせる土地の人々の心情が描かれている。そのなかで, 主題歌はこう謳われる。

暑きゴビはわが身内, 母の愛で繋がる黄金のゴビよ
 一步も離れ難きわが故郷よ, 蜃気楼の立つ夢のゴビ

ここには, 日本人が抱いてきたゴビのイメージを大きく変えるものがある。ゴビは人々が住み, 生きる糧を得るところであり, そこを故郷とする人々の愛してやまない土地なのである。ただし, この映画は日曜ではあるがNHK教育テレビの午後3時からという時間枠では, どの程度, 人々が視聴したかは疑問である。ともあれ, 日本人のゴビ観は今後は徐々に変わってゆくのであろう。

しかしながら, 一般には, ゴビへの関心は, 以前に比してかなり薄れているといえる。かつて知識層の詩情をそそり, 若い世代の冒険心をかき立てた「ゴビの沙漠」は, サハラやアラビア, あるいはタクラマカンなどの極乾燥の sand desert の目立つ漠に較べて, desert として取り上げられることは少なくなっている。ラクダをとっていても, 戦前戦中世代のイメージはゴビに棲むフタコブラクダが主であったが, 現在の若い世代は, 平山郁夫の絵や, 映画「アラビアのロレンス」などの影響のせいから, ヒトコブラクダをイメージしがちである。

2 「ゴビ」や desert のイメージの変化に関する問題点

小堀(1973)は, 日本人と沙漠(小堀はこの語を用いている)との関係を, <情緒的なあるいは情動的なものが大部分であって, 実際に沙漠の世界で仕事をしたとか或いはしているとかいうことからくる切実な現実感に乏しい>と述べた。それから20年経った。国際的な問題や仕事が増えた日本人にとって, 果たしてどれだけ漠の認識が現実感をもったものになったであろうか。ゴビに関してはモンゴル語やモンゴル史の研究のほか, 文化人類学, 宗教学, 生態学, 農学など諸分野において多くの実証的研究がなされているが, それらは一般の人々のゴビ認識には, あまり強い影響は与えていないようである。

地理学では, 近年, desert に関する優れた概説書や啓蒙書が赤木(1990, 1994)によって執筆され, また学際的な「砂漠学会」も組織された。ゴビについても, この赤木の著書に紹介されており, 筆者の前報に引用した諸論文, 著書と合わせれば, 現時点での研究の現状がおおむね理解できる。

しかしながら, 一般のゴビ認識は, 地理教育の場で取り上げられることの少なくなったこととあいまって, むしろ低下しつつあるのではないだろうか。

地理教育においては, desert(漠)には sand desert(筆者の用語による砂漠)以外に礫漠や岩石漠のあることを学習するようになってきた。しかし, 前述のように, 高校生や大学生の認識は, 概して従前の desert=砂漠のイメージにとどまっている。ゴビについても, もちろん一部には sand desert もみられるから全くの間違ひとはいえないものの, その大半を占める礫漠や岩石漠のイメージを描くものは少数である。

これに加えて, 古来, 日本の知識人を魅了し, 明治以降は若者の血を湧かせたゴビの名は, 地理教育の場でも消えつつあるのである。

けれども、筆者は、日本に最も近い乾燥地域、古来最も身近な漠として、ゴビに関する学習が重要であり、また漠が砂で覆われているものばかりではないことを学習するためにも、ゴビ漠を積極的に取り上げるべきであると考えている。

おわりに

ゴビ desert すなわちゴビ漠に対し日本人が抱いてきたイメージは、次のように変化したといえるであろう。

- ① 乾燥した「砂」の世界というエキゾチズム
- ② 辺境の地の孤立した「城塞」とその守備隊に代表されるロマンチズム

これらは、古代以降、日本人の知る唯一の沙漠であった《ゴビからタクラマカンに続く広大な「ゴビの沙漠」》の代表的イメージであった。①は「胡沙」や「流沙」、あるいは駱駝（ラクダ）のイメージと結び付いていった。

近代になると、世界の「沙漠」が知られるようになった。それは

- ③ 「砂丘」をゆく「隊商（キャラバン）」とその中継点の「オアシス」に魅かれるロマンチズム・エキゾチズム

であり、世界地理の学習やアラビアンナイト、フランス映画などにより、アラビアやサハラ
の漠が知られるようになり、ゴビ（この場合、タクラマカンを含む広義）のみの持つイメージではなくなった。しかし、明治後期以降、ゴビは別なイメージを持つようになった。

- ④ 「馬賊」など青少年のロマンチズムに訴えるイメージとそれを利用した「満蒙開拓」など帝国主義、侵略主義の対象としてのイメージ

第二次大戦後は、この④のイメージは消えた。その後しだいにゴビへの関心も低くなった。騎馬民族説の登場や西域やシルクロードのブームによって、再び人々のイメージのなかにゴビは蘇るが、それは次の⑤と⑥の二つに分かれてしまいがちである。

- ⑤ 「草原」を疾駆するチンギス・ハーンの騎馬軍団のイメージ
- ⑥ 「砂漠」を結ぶシルクロードのイメージ

地理教育でも、地誌的にはゴビの持つ意味が相対的に低下し、自然地理的には「砂漠」ないしは desert の典型例としては用いにくくなった。日本人のゴビのイメージは、一方では関心の低下、他方ではイメージの混乱がみられる「変化」の時代になったといえる。

地理学や地理教育の立場からは、ゴビのイメージをどのように変化させ、どのように人々に定着させてゆくべきなのであろうか。desert (漠) の認識の変化が、深まりとともに却って認識が混乱しているともいえる。その微妙な問題は、例えば次のような教科書での扱いにもみられる。

帝国書院の高校用教科書『新詳地理B』（1994）には、ゴビの名が登場するのは一か所だけである。その口絵（図2）の「さまざまな気候景観」というなかでは、砂漠気候としてアルジェリアのサハラ漠の砂丘の景観を載せている。一方、ステップ景観として中国、内蒙古の写真を載せ、こう解説している。



▲⑤砂漠気候（アルジェリア） 風をさえぎるものが少ない砂漠では、土や砂が吹き払われて岩盤や礫だけが残っていたり、反対に砂が吹き寄せられて砂丘になったりしている。砂丘は少しずつ風下に移っていくので、大砂丘の多い地域では、オアシス集落や灌漑耕地が埋めつくされることもある。このなつめやしの畑と水路にも、その危険が迫っている。（→p.75, 106）

▼⑥ステップ気候（中国、内モンゴル） ゴビ砂漠南東のステップでの、モンゴル族の羊の放牧。背後にゲル（中国語ではパオ）という細枝の骨組みにフェルトを張ったテント式住居があるが、右手に見える作業場から、ここではかれらの定着化が進んでいることがわかる。内モンゴルでは、難民統などによるステップの耕地化も拡大している。（→p.75）



図2：高校用教科書『新詳地図B』（帝国書院1994）の口絵「さまざまな気候景観」の一ページ（原図はカラー印刷）。上は砂漠気候景観の例としてサハラ漠，下はステップ気候景観の例としてのゴビ漠。中間の説明文は、同教科書の原文のままである。

ゴビ砂漠南東のステップでの、モンゴル族の羊の放牧。(後略)

この書き方は写真のステップ地帯はゴビ漠に含まれるように読み取れるが、本文を参照せよという但し書きがあり、その本文には次のように、「砂漠の外側」と書かれている。

ステップ気候区 砂漠の外側では、夏の、または冬から春先までの降水量がやや多くなって、雨季があらわれる。このため、短い草や低木が育ち、ステップとよばれる草原となり、栗色土が発達する。(後略)

この気候区分は主にケッペンのそれに拠っているが、この場合の「砂漠」の定義よりも広い概念で「ゴビ砂漠」という自然地域名称が用いられていることに留意しなければならないが、教科書にはその点の配慮はなされていない。

さきに述べたように、逆にゴビ漠を積極的に取り上げて、乾燥地域ないしは漠 desert の景観の多様性を学ばせ、的確なイメージを抱かせるようにはできないものであろうか。また、地域のイメージは自然地域といえども時代とともに変化するものであることは、学ばなくてもよいのであろうか。

地域を科学的、客観的に捉えることが地理学や地理教育の最も重要な目的の一つである。しかし、それとともに、地域をみつめる眼には、主観的、情緒的なものも必然的に伴っていることを、知ること、学ぶこともまた、目指すべきではないだろうか。

謝辞 浅川俊夫・梅津讓の両氏には高校生の調査などについてご協力いただいた。記して謝意を表す。また、この小論は、1993年2月の岩手大学教育学部学会例会ならびに1993年7月の東北地理学会例会において報告したものの一部に加筆補訂したものである。これらの例会の折ならびにその後、種々ご教示をいただいた両学会の方々に感謝申し上げる。

注

- 1) 莫は音符で、「無い」の意味である。
- 2) 漠の用例は多いが、良く知られた漢詩の中から例示する。
「横漠築長城（漠を横ざりて長城を築く）」（煬帝「飲馬長城窟行」）
「大漠孤烟直（大いなる漠に孤烟直し）」（王維「使至塞城」）
- 3) 「胡沙」のこのような用例についての論議は他の機会に譲るが、江戸時代においても最上徳内がこの意味の「胡沙」を用いた和歌を作り、明治時代になっても、大橋乙羽が「陸奥ときへ云へば、胡沙吹きまくる夜嵐に」（『千山萬水』）などと書いている。
- 4) 中村（1992）によれば、1875（明治8）年の小売値段は『地理初歩』が三銭三厘で、三冊ものの福沢諭吉『世界国尽』一円二五銭の一冊分の約四十分の一に過ぎない。『地理初歩』は徳富蘆花の『思出の記』にも「単語編地理初歩から読み初めて…」と熊本の小学校に入学したころの回想があり、最も基本的な教科書とされていた。復刻の例を挙げれば、宮城県での翻刻版は早くも1873（明治6）年に刊行されている。
- 5) 『一握の砂』所収。なお、啄木の歌稿ノート『暇ナ時』では、後半は「住み玉ふ神は怖ろし

からむ」となっている。

6) いわゆる「満州国」へ武装農民として入植した青少年の組織も「満蒙開拓義勇軍」と呼ばれた。ただし、大興安嶺以西を「満州蒙古」と呼ぶ場合もあった。

7) 筆者も、1941年7歳であったが、父の転勤の候補地三箇所のうち、お前はどこがいいかと父に聞かれて、チチハルが好きだと答えたことがある。日本国内の他の土地と異なり、満州の北部ということがなんとなく魅力的に思えたのであった。

8) 1980年製作、NHK教育テレビのアジア映画劇場のなかで放映された。

文 献

- 赤木祥彦 (1990) : 『沙漠の自然と生活』. 地人書房. 245 p. 京都.
- 赤木祥彦 (1994) : 『沙漠ガイドブック』. 丸善. 94 p.
- 安部公房 (1958) : 沙漠の思想. (初出「群像」) 『沙漠の思想』講談社. 1994. 329-342.
- 加茂儀一 (1960) : 『榎本武揚』. 中公文庫版. 1988. 623 p.
- 井上靖 (1969) : 『西域物語』. 新潮文庫版. 1977. 256 p.
- 小堀巖 (1973) : 『沙漠 遺された乾燥の世界』. 日本放送協会. 217 p.
- 五味川純平 (1978) : 『ノモンハン (上)』. 文芸春秋社. 265 p.
- 中村紀久二 (1992) : 『教科書の社会史』. 岩波書店. 244 p.
- 司馬遼太郎 (1978) : 『街道をゆく モンゴル紀行』. 朝日新聞社. 323 p
- 司馬遼太郎 (1992) : 『草原の記』. 新潮社. 223 p
- 東京学芸大学地理学教室 (1980) : 「『教育地名』の選定とその学習の系統化に関する研究.」同教室. 219 p.
- 花田清輝 (1948) : 沙漠について. 講談社文庫. 1989. 『七・錯乱の論理・二つの世界』. 210-228.
- 花田清輝 (1965) : 草原について. 講談社文庫. 1991. 『恥部の思想』. 168-199.
- 和辻哲郎 (1935) : 『風土』. 岩波文庫版. 1979. 299 p.
- 米地文夫 (1994) : 地理教育用語としての自然地域名称「ゴビさばく」の問題点—モンゴル・中国における用例に関連して—. 『新地理』. 42. 44-50.

(なお、古典、教科書、地図帳および文学作品の一部などを省略した。)